人物識別の正確さに及ぼすラインアップ方法の影響

幼児と成人における同時提示法と消失提示法の比較

杉村 智子

(福岡教育大学)

キーワード: 幼児, 人物識別, 消失提示法

Children's and adults' identification accuracy: Comparison between simultaneous and elimination lineup procedures

Tomoko SUGIMURA

Fukuoka University of Education

Key words: Young children, Identification accuracy, Elimination lineup

【目的】

子どもによる人物識別の正確性を高める写真提示の方法について、従来子どもに有効であるとされてきた同時提示法よりも消失提示法が有効であるという研究結果が示されている (Pozzulo & Balfour, 2006; Pozzulo, et al., 2009)。しかしこれらの研究は欧米で行われたものであり、日本の幼児を対象とした検討はなされていない。本研究では、幼児と成人を対象とし、消失提示法の有効性について、ラインアップにターゲットが含まれている場合 (プレゼント条件) といない場合 (アブセント条件) を検討する。

【方法】

調査対象者: 幼児 84 名 (M = 5:3. 3:6-6:6), 成人 83 名 (M = 18:11, 18:6-23:8)。それぞれを、平均年齢が等しくなるように、下記の 4 条件にふりわけた。

材料: 目撃事象: 2 名の人物が登場する 80 秒間のビデオ。ラインアップの写真: ターゲット 1 枚 (男性の肩から上のカラー写真) とディストラクタ 6 枚 (ターゲットと異なる 6 名の男性)。いずれの写真も縦 300×横 200 pixels であった。

手続き: 個人実験で行われた。17 インチのモニターを使用して 80 秒間のビデオをみせた直後、以下の 4 条件で人物識別を行わせた。

①プレゼント同時提示 (P 同時): 6 枚の写真 (1 枚がターゲットで 5 枚がディストラクタ) を同時に並べて提示し、その中にビデオで見た男性がいるかいないかを尋ね、「いる」と答えた者にはそれがどの写真か指で指すように教示した。「いない」と答えた場合は調査を終了した。

②プレゼント消失提示 (P 消失): 6 枚の写真 (1 枚がターゲットで 5 枚がディストラクタ) を同時に並べて提示し、この中からビデオで見た男性と一番よく似ていると思う写真を 1 枚選択させた。選択された 1 枚の写真のみを残して残りの 5 枚は画面から消し (消失提示)、この男性がビデオで見た男性と同じか違うかをもう一度判断するように教示した。

③アブセント同時提示 (A 同時): 6 枚の写真 (6 枚全部がディストラクタでターゲットは含まれていない) を同時に並べて提示し、その後の手続きは P 同時条件と同様。

④アブセント消失提示 (A 消失): 6 枚の写真 (6 枚全部がディストラクタでターゲットは含まれていない) を同時に並べて提示し、その後の手続きは P 消失条件と同様。

【結果と考察】

(1)反応の分類: 条件ごとに、以下のように反応を分類した (図 1, 2)。P 同時: 正再認 (ターゲットを選択), 誤再認 (ディストラクタを選択), 誤棄却 (ターゲットはいないと判断), わからない。P 消失: 正再認 (ターゲットを選択し, 消失提示の際に「同じ」と判断), 誤再認 (ディストラクタを選択し, 消失提示の際に「同じ」と判断), 誤再認棄却 (ディストラクタを選択し, 消失提示の際に「違う」または「わからない」と判断), 誤棄却 (ターゲットを選択し, 消失提示の際に「違

う」または「わからない」と判断), わからない。A 同時: 正棄却 (ターゲットはいないと判断), 誤再認 (ターゲットがいると判断), わからない。A 消失: 正棄却 (消失提示の際に「違う」または「わからない」と判断), 誤再認 (消失提示の際に「同じ」と判断), わからない。

(2)同時提示と消失提示の比較: プレゼント条件において、同時提示と消失提示の正再認率を比較するために χ^2 検定を行ったところ、幼児も成人も、提示方法による差は見られなかった。また、誤再認についても差はみられなかったが、幼児、成人ともに、同時提示において誤棄却を行った者が多かった ($\chi^2 = 7.44$, $df = 1$, $p < .006$; $\chi^2 = 13.24$, $df = 1$, $p < .000$)。アブセント条件においては、正棄却と誤再認いずれにおいても提示方法による差はみられなかった。

(3)幼児と成人の比較: プレゼント条件において、幼児と成人の正再認率を比較するために χ^2 検定を行ったところ、消失提示において成人の方が正再認をした者が多かったが ($\chi^2 = 4.28$, $df = 1$, $p < .038$)、同時提示では差はなかった。また、成人は幼児よりも同時提示において誤棄却を行った者が多かった ($\chi^2 = 4.05$, $df = 1$, $p < .044$)。アブセント条件においては、同時提示と消失提示のいずれにおいても、幼児よりも成人の方が正棄却を行った者が多かったが ($\chi^2 = 19.05$, $df = 1$, $p < .000$; $\chi^2 = 4.84$, $df = 1$, $p < .028$)、誤再認については両者の差はみられなかった。

本研究では、消失提示は誤棄却を減らす効果はあるものの、幼児の正再認率を高める効果は確認されなかった。また、成人と比較すると幼児は、ラインアップにターゲットがいない場合に、「いない」と正しく判断できない傾向にあった。

付記: 本研究は、(独)科学技術振興機構社会技術研究開発事業の研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」の研究開発プロジェクト「犯罪から子どもを守る司法面接の開発と訓練 (代表: 仲真紀子)」の一環として行われた。

図1 プレゼント条件における各反応の人数 (%)

	正再認	誤再認	誤再認棄却	誤棄却	わからない	合計
同時	成人 5 (23.8)	1 (4.8)	—	15 (71.4)	0 (0.0)	21 (100)
	幼児 3 (13.6)	5 (22.7)	—	9 (40.9)	5 (22.7)	22 (100)
	合計 8 (18.6)	6 (14.0)	—	24 (55.8)	5 (11.6)	43 (100)
消失	成人 9 (45.0)	5 (25.0)	1 (5.0)	3 (15.0)	2 (10.0)	20 (100)
	幼児 3 (15.0)	4 (20.0)	6 (30.0)	1 (5.0)	6 (30.0)	20 (100)
	合計 12 (30.0)	9 (22.5)	7 (17.5)	4 (10.0)	8 (20.0)	40 (100)

図2 アブセント条件における各反応の人数 (%)

	正棄却	誤再認	わからない	合計
同時	成人 19 (90.5)	2 (9.5)	0 (0.0)	21 (100)
	幼児 5 (23.8)	7 (33.3)	9 (42.9)	21 (100)
	合計 24 (57.1)	9 (21.4)	9 (21.4)	42 (100)
消失	成人 16 (76.2)	4 (19.0)	1 (4.8)	21 (100)
	幼児 9 (42.9)	6 (28.6)	6 (28.6)	21 (100)
	合計 25 (59.5)	10 (23.8)	7 (16.7)	42 (100)